

天 花

TENGE

第41号

平成元年8月1日
発行山口県立美術館



雲谷等与「雪舟像」

雲谷等与
雪舟像

寛永16年(1639)頃

絹本彩色 1幅 83.1×30.8cm(個人蔵)

延宝六年(一六七八)狩野永納が編集した『本朝画史』の中には、雪舟がその自画像を弟子である宗淵と秋月にそれぞれ与えたという記事がみえる。また同書には、その弟子の秋月が、九条の袈裟を身につけ、烏紗巾をかぶり、手に琵琶を弾く雪舟像を描いていたという記事もみえている。しかし、これらの作品は今はいずれも所在不明であり、はたして亡失してしまっただかどうかも明らかではない。ただ、秋月に与えた自画像の古写本とみられる作品(挿図1)は大阪の藤田美術館蔵として現在も伝来している。この作品には中国の明代の文人(李時行あるいは杜堇の二説ある)の賛の写しがあり、

その末尾に雪舟が七一歳の冬に自ら筆をとってその寿像を描き、秋月に与えた旨を書きしるした落款を写している。このことから、この原本である雪舟七一歳像を延徳二年(一四九〇)に弟子秋月がさずけられ、その後入明した際にその雪舟自画像を携えていき、彼の地の文人に賛を求めたのではないかと考えられている。いっぽう、この七一歳像のほかに山口雲谷庵伝来といわれる八三歳の行年書きの落款をもつ自画像(挿図2)があり、これとほとんど同図様

のものが、秋月筆の模本として東京国立博物館蔵の狩野家粉本(裏辻憲道氏論文「画説九号」)や、谷文晁編の『本朝画纂』(挿図3)に登場している。しかし、けつきよくはこの八三歳像といわれる作品にしても、七一歳像から派生したかなり後の模本であるとみられている。さらに、これらのほかに、これも模本と考えられているのだが、昭和三十一年の雪舟展の際発見された資料として、「雪舟筆」の落款をもちながら、袈裟を身につけ、烏紗巾をかぶり、琵琶をかかえるという、冒頭でふれた『本朝画史』の秋月筆雪舟像の記述にきわめて近い作品(挿図4)もあることが報告されている。

画人で、その派の始祖等顔から数えて三代目にあたる雲谷等与(一六一二〜一六八)によって描かれた雪舟像である。図上には大徳寺第一六九世天祐紹果の着賛があり、それによると雪舟七一歳の冬に描かれた自画像を写したことが明記され、先に述べた藤田美術館本と同じ原本をもとにしたものであることがわかる。さらに注目すべきことは、天祐の着賛が寛永一六年(一六三九)のものであることが文末に書かれていて、その年以前にこの写しが成立していることがわかる点である。またこの等与本のほかに、やはり七一歳像を寛文二年(一六六二)九月に写したと記される探幽縮図(挿図5・京都国立博物館蔵)があり、こうしたその制作年をほぼ知ることができるものは、多くの雪舟自画像写本の中でもこの二本だけで、その意味からも貴重な資料といえることができる。

作品の画面自体は若干染みがある程度で、絹地の痛みも少なく保存状態は良好である。納衣部分に薄墨を掃き、袈裟には薄い群青を用い、紐にほどこされた朱が、画面の色彩効果を高めている。顔貌は、やはり模本であるためか、その描線には部分的に硬直したところもみられるが、輪郭は的確で、品格をもち、おだやかな趣きをたたえながらも、毅然とした意志の強さを感じさせる風貌となっている。

この等与本のように七一歳像をもとに成立したと思われる模本は、先の藤田美術館本や探幽縮図本のほかに、大徳寺第一八五世玉舟宗瑠の賛をもち、等与の父である雲谷等益(一五九一〜一六四四)の筆による作品(挿図6・常栄寺蔵)、さらに江戸初期に本願寺絵所として活躍した徳力善雪(一五九八〜一六八〇)の描いた作品(挿図7)がある。当然のことではあるが、等与本はその形姿や描写においては、父である等益の作品にきわめて近似している。像容そのものの大きさもほぼ同じであるが、等与本は等益本にくらべ若干小さいので、そのぶん画面に対する像自体の割合は大きくなっている。

こうした多くの雪舟像が描きつがれた事実は、桃山から江戸初期にかけて画師たち内部に流派という意識がはつきりと芽ばえ、その源流たる雪舟をあたかも禅宗における祖师像のようにあがめ、尊ぼうという状況が生まれていたことを象徴的に示すものであることにはかならない。

(菊屋吉生専門学芸員)



插圖-3



插圖-2



插圖-1



插圖-6



插圖-7



插圖-4



插圖-5

室町文化のなかにみる

大内文化の遺宝展

はじめに

室町時代、山口に居館をかまえ、西国に覇をとなえた大内氏は、ある意味で、きわめて室町時代的な特徴をもった大名であった。本展は、この大内氏を具体的な遺品から浮かびあがらせてみようという試みである。そのため、大内関係遺品だけでなく、室町時代の遺品を広くとらえ、そこに大内の果たした役割をさぐるようとしたのが、本展タイトルの示すものである。

展覧会は、二部構成で、第一部では大内氏の初期から、滅亡までを多様な資料によって、多角的にとらえようとする。第二部は、室町文化のなかでも、大内氏とかわりのふかい美術作品をとりあげ、その特質をさぐるようとするものである。

第一部 大内氏の興亡

第一部は以下の四コーナーから構

成されている。ここではまず大内氏の略史を記し、つぎに主な出品作品をあげる。

一、初期大内氏から弘世の山口開府へ

二、義弘・盛見とその時代

三、政弘・義興とその時代

四、義隆から毛利氏へ

大内氏略史

大内氏は、平安時代末頃には多々良姓の在庁官人として現われ、周防権介の地位を得るに至る。鎌倉時代には、在庁官人であるとともに、鎌倉御家人ともなり、権力をかためていき、それは時に東大寺と争うまでになっていった。

南北朝時代、大内弘世は、周防の守護となり、権力を確立し、一三六〇（正平一五）年頃には、大内地方から山口へ本拠を移した。弘世の妻は、京都の公家、三条家の出といい、山口を京風に整備したといわれる。

けたが、伊予の戦陣で病死した。教弘は、管領細川氏と対外貿易の利権を争いつつ勢力をたくわえ、豪壮な築山館を建てたことで知られる。

教弘の子の政弘は、河野氏とともに幕府軍をやぶり、応仁、文明の乱では山名氏とともに西軍の中心的存在として重きをなした。政弘は対明、対李朝交易にも力をいれるとともに、文芸を庇護、宗祇を山口にまねき、『新撰菟玖波集』を成立させるとともに、雪舟を保護したことも知られる。

政弘の子、義興は、細川政元に將軍職を追われた足利義植を奉じて入京し、義植を復職させ、自らは管領代として、ながく京にとどまり政治むきだけでなく、文芸や有職故実などをおさめた。また、山口帰国後は尼子経久と戦い、毛利元就を味方に引き入れた。

義興病死のあとをついだ義隆は、北九州を制圧、出雲へ出兵したが敗れ、子の晴持を失った。この後は転戦せず、公家文化を中心に文芸の庇護につとめるとともに、神社の造営などにも力をつくし、厳島神社、宮崎宮などいまま義隆ゆかりの遺品を伝えるところも多い。またザビエルに会い、キリスト教の布教を許した

ことでも知られる。また対外貿易にも力を入れ、漆工、染織などに義隆が注文したと伝えられるものがある。このように文化的には最高潮に達した感があるが、天文二〇（一五五一）年には、陶氏にそむかれ、長門大寧寺に没した。陶氏らは、大友宗麟の弟、義長をたてるが毛利元就に追われて自殺、ここに大内氏は滅亡する。

第一部の主な出品作品

出品作品は、大内関係遺品だけでなく、足利將軍家や、細川、大友、尼子など密接な関わりをもった人物や家臣、さらには雪舟などの画像、ザビエル関係などで構成される。

- ◎騎馬武者画像(伝足利尊氏) 文化庁
- ◎足利義詮画像 京都 宝慶院
- ◎盛見奉納 神輿障子絵 宇佐神宮
- ◎細川澄元画像 永青文庫
- ◎義隆奉納 藍韋威肩赤鎧 厳島神社
- ◎義隆奉納 黒漆革包太刀 大山祇神社
- ◎毛利元就画像 豊栄神社

第二部 室町文化と大内氏

ここでは大内氏にかかわりのふかいテーマをとりあげ、室町時代美術のある断面を切り、そこから、室町文化の特質をさぐるうとするものである。

ある。

一、雪舟とその画系

ここでは大内氏との関わりを視野に入れつつ、雪舟の画業を幅広くながめてみるとともに、雪舟とごく近い位置にあってその画風を受けついで画人たちの作品を展示する。

雪舟と周防との関連を述べる最も早い文献は朝之慧鳳の「竹居西遊集」である。この中で管領細川勝元の私使として寛正五年（一四六三）周防を訪れた慧鳳は、そこで雪舟に会い、およそ一〇年ぶりの再会を喜ぶことを述べている。この寛正五年の一〇年前は享徳三年であり、雪舟は三五歳にあたる。つまり三五歳以後に慧鳳のいた京都を離れ、周防へ下向したのではないかと考えられている。

心仁元年（一四六七）、雪舟は入明を果たすが、これは大内氏がしたてた遣明使三号船に陪乗したものであった。帰国後の雪舟は、しばらく北部九州を遍歴し、文明一〇年頃までには、再び山口へ帰還したようである。在京以来の友人である了庵桂悟は、「天開図画楼記」の中で、当時の雪舟の人気ぶりを「野客官僚、好事の儔、踵を接して至る」と述べ

ているが、その前文に「是に由つて賢太守、時々此に周旋し、此に消揺す。」とあり、賢太守（大内政弘）が時折雪舟を訪ねていたことを記している。

今回出品される雪舟の最晩年の作品とみられる大原家蔵「山水図」には、牧松周省（石見益田氏の出身）の賛とともに、雪舟没後、永正四年に了庵が、その画房である雲谷軒を訪れてなされた着賛をみることで、この作品が山口に残された雪舟の遺作であったことを推測させる。

また、この山口における雪舟の居所、雲谷軒についても大内氏と雪舟の關係の上に築かれたものであろうことが想定される。了庵は雲谷軒を訪れた七年後の永正一年に「題雪舟山水図詩」（藤田美術館蔵）を書き残し、そこで「西周太守漂泊を憐み、雲谷幽廬老狂を安ず」と、大内政弘が雪舟に対してその遍歴生活を不憫に思い、雲谷軒を与え、安居させたことを述べている。こうした史料の記述をみても山口における当時の雪舟の状況、さらに大内政弘との関係などがどのようなものであったかがある程度想像することは可能であろう。

展覧会では雪舟の作品としてこの

ほかに一連の雪舟筆団扇形作品四点とともに江戸初期にこれらの団扇形作品（一二図）を狩野常信が模写した「流書手鑑」を同時展示し、対比することも試みてみたい。また、「四季花鳥図屏風」（出光美術館）、「四季花鳥図屏風」（永青文庫）、「山水図屏風」（奈良県立美術館）といった伝雪舟作品を展示することにより、さらに幅広い観点から雪舟の画業を検討できればと考える。

このセクションのもうひとつの特色として、展示の後半に、雪舟の若描きか否かで現在においても議論の分かれる拙宗等揚をはじめとする雪舟周辺あるいはその画風を受けついで画人たちの作品を集めた。雪舟との交流があつた禅僧牧松、雪舟に直接師事したと考えられる秋月、周徳、宗淵、等春といった画人たち、雪舟を学び室町時代末に周防で活動したと考えられる雲溪、照陽軒珠阿、さらには江戸初期の画人系譜である「画師的伝宗派図（江月宗玩の墨跡手控のうち）」で雪舟の弟子とされる承虎、元賀、そして秋月の弟子とされる等芸、等碩など、そのほか他の画伝類に雪舟派として登場する等禅、周耕、楊月ら、ほぼ一六世紀までを活躍期と考えられる雪舟画風の



藍韋威肩赤鎧



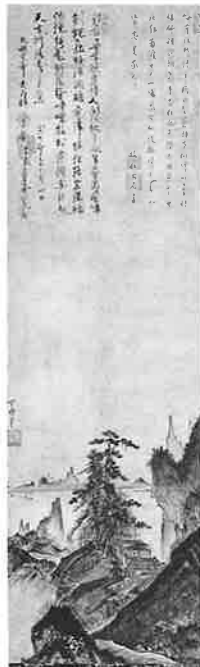
石屏子介倚坐像



騎馬武者画像



天神図



山水図 雪舟筆



天橋立図 雪舟筆



梵鐘 大和相秀作



段替菊笹亀甲大内菱文唐織



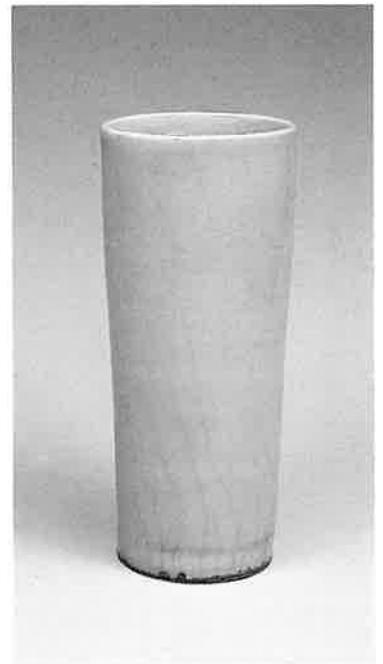
六祖挾擔図 直翁筆



出土一括陶磁(山口県徳山市)



出土一括陶磁(山梨県一宮町)



青磁筒花入 大内筒

後継者たちの作品を同時に観ることによって、室町期におけるその受容と拡がりのあり方について考えてみたい。

以下に文中にふれた以外の主な出品作品をあげる。

- 雪舟筆 天橋立図 京都国立博物館
- 雪舟筆 四季山水図 東京国立博物館
- 雪舟筆 慧可断臂図 高年寺
- 雪舟筆 山水図 香雪美術館
- 拙宗 破墨山水図 正木美術館
- 秋月 西湖図 石川県立美術館
- 等春 人物花鳥図貼付屏風

二、対外貿易と唐物趣味

略史でも見たように、大内氏は対明、対李朝貿易に力をそそぎ、そこから得た富は権力を支えるものであった。しかし、利益のみで大内氏が動いたものでないことも略史でふれたとおりで、出自を百済の王族とし、さかんに李朝に対して、交易だけではない働きかけをくりかえしているのである。

本展では、大内氏ゆかりの唐物を展示するだけでなく、書院の一室を復元し、そこに、これも大内氏とのゆかりがふかい『君台観左右帳記』などにもとづいて、座敷飾りを試みる。以下に主な出品作品をあげる。

- 直翁筆 六祖挾擔図 大東急記念文庫
- 伝徽宗筆 秋景冬景山水図 金地院
- 菊花文螺鈿経箱 東京国立博物館
- 茶入 上杉瓢箪 野村美術館
- 青磁筒花入 大内筒 根津美術館
- 大内氏勘合貿易印等関係資料 毛利博物館

このなかでは、「六祖挾擔図」の「道雄」印が、他に例がなく、速断はゆるされぬが、大内盛見の法名「道雄」との関連が注目され、また、大内氏と茶の湯は、そのふかい関わりが指摘されながらも、具体的遺品にとぼしく、そのなかでは大内の名を銘とする筒花入は注目せざるを得ない。

三、禅学と文芸

大内氏が神社に対して、積極的に関わりをもったのは略史にふれたとおりであるが、ここでは大内氏ゆかりの禅僧にかかわる作品を展示する。また大内氏が文芸の積極的な庇護につとめたことも略史で述べた。ここでは、大内氏と関わりのふかい、公家、文人などの画像や、歌集などを展示する。以下に主な出品作品をあげる。

- 山荘図(太白真玄他贊) 正木美術館
- 天神図(惟肖得嚴贊) 古熊神社
- 大内版法華経并版木(興隆寺版) 山口県文書館

- 宗祇画像(伝狩野正信) 徳法寺
- 三条西実陸画像 二尊院
- 拾塵和歌集 山口県文書館
- 聚分韻略(義隆跋) 岩国徴古館

四、工芸美術の諸相

ここでは、大内氏および室町時代の山口に関わりのふかい工芸作品をとりあげる。

刀剣では、鎌倉時代から室町、桃山、江戸と山口で活動した二王派をとりあげた。また梵鐘では、沖繩の円覚寺の殿前鐘であつたと伝え、「防州 大和相秀」の銘のある作品が出品される。また、一時期、大内氏と関わりのふかつた芦屋の作品として、鰐口や釜などが出品される。

漆工品では、大内氏とよばれる作品や、義隆が神社に奉納したと伝える作品が展示される。染織では、義隆が明に注文したと伝える大内菱が織りだされた金襴などが出品される。

陶磁器では一括出土資料に注目した。ひとつは山口県徳山市から出土したもので、備前の大甕に入れられていたもので、中国の青磁、白磁、天目、青花、李朝の粉引などが入れられていた。これとほぼ同時期と思われるものが山梨県一宮町から出土している。こちらは常滑の大甕に入

れられていたもので、中国の青磁、青花、瀬戸の灰釉などが内容物である。とくに青磁、青花はきわめてよく似たものがあるという共通項と、入れてあつた甕の産地の違いや、瀬戸と李朝という地域差をよく示すもの存在など興味ぶかい点も多く、当時の陶磁器の状況をうかがうための資料として出品される。以下に主な出品作品をあげる。

- 三王清綱 太刀(文永銘) 厳島神社
- 大和相秀作 梵鐘 沖繩県立博物館
- 大江宣秀作 芦屋鰐口 美栄神社
- 枝菊漆絵椀 毛利博物館
- 金襴縫合打敷 大徳寺
- 段替菊笹亀甲大内菱文唐織 厳島神社

●重要文化財
●印国宝
(榎本徹 学芸課長)

会期	8月6日(日)～9月17日(日)
休館日	月曜日(ただし8月7日(月)は開館)
開館	9時～16時30分(入場は16時まで)
時間延長	8月6日・7日は入場20時まで(閉館20時30分)
入館料	一般 720円(610)
	高大生 510円(410)
	小中生 300円(200)
協賛	山口市

開館10周年を
迎えて館長
河野良輔

地方の時代、文化の時代、という言葉が叫ばれて既に久しい。

そしてそのキャッチフレーズを象徴するかのような現象として、地方公共団体の美術館が全国的に簇生し、既に一県一館を通り越して、いまや市町村立の美術館の建設ラッシュともいべき時代を迎えている。

山口県立美術館は、このキャッチフレーズがまだ新鮮な響きと希望とを湧き起こさせた昭和五〇年前後に、六年間の準備期間を経て、昭和五四年一〇月六日に開館した。

地方の時代、文化の時代を身を以て体現しようとした、あの熱気に満ちた準備段階では、先づ美術館運営の生命ともいべき学芸専門職の人材の確保と養成に腐心したこと。そ

して建築面においては、設計者に山口県の歴史と風土をよく理解して頂き、美術館の構造、機能を最高に發揮するために、設計者と使用する側の学芸員との徹底した意志疎通を図ったこと。この基本的な重要な二つの命題は、有難いことに、前者については東京国立近代美術館ほか国立機関による温かい御支援と、後者については鬼頭梓建築設計事務所の絶大な御協力（新建築・一九八〇・一、建築文化・一九八〇・一の両誌掲載の鬼頭梓氏論文参照）とにより、独自の方法を実現し、関係者が精魂を込めて開館に漕ぎつけたことを忘れることは出来ない。

こうして一つには中世大内文化の雪舟以来の豊かな文化土壌の掘り起し（山口県美術史の体系化）と、二つには県民の芸術文化創造の拠点となることを、館の指標として発足して今年一〇周年を迎えるに至った。

まことに早いもので、あの草創期の五里霧中、暗中摸索というか、ただ無我夢中で走り抜けて気がついたら、最早一〇年経っていたというものが実感である。

当館の性格は、郷土色豊かな美術館として郷土関係作家を中心とする作品の収集、展示に力点を置くこと

は論を俟たないが、さりとて美術史的美術館の立場にのみ比重をかけるものではなく、地域に根ざしながらも、広い視野に立って現代にも目を注ぎ、さらに未来をも展望する同時代美術館として、県民文化の創造に資する立場も重視している。

したがって、美術館活動の車の両輪ともいべき企画展事業と蒐集事業においても、この二つの性格は如実に反映されており、「狩野芳崖」の開館記念展以来、年間三本の企画展を、大企画二、小企画一の割合で古い分野と新しい分野、またジャンル別にも異種のジャンルの組み合わせ等で、絶えず変化を持たせるような心がけているし、小企画は開館以来山口の現代美術をテーマに、美術と工芸、それも萩焼という伝統工芸を地場産業にもつ本県の場合は、特に陶芸にしばって隔年毎に展開しており、例えば大企画展で「古萩」展を実施すると、常設展に現在の萩焼を展示し、小企画では世界的視野での「現代の陶芸シリーズ」を展開するというように、これらの出品作品をも蒐集して、館藏品にも過去、現在、そして未来を見据えたコレクションを意図しているのである。

他方、共催展として、新聞社、テ

レビ会社等の巡回展を年間三本ほど誘致し、これによって世界のすぐれた美術を県民に紹介しよう心がけて来たが、今後この面における多様化、大規模化、国際化の傾向に対する対応を迫られる折しも、開館一〇年にして学芸員の海外派遣研修制度が知事さんの英断によって実現し、将来外国展を誘致するために他者との共同企画体制の検討も可能になって来た事は、一〇周年における大いなる前進といふべきであろう。

その他の展覧会事業としては、県下の学校美術展や、地元大学の卒業制作展、そして県内二ヶ所を巡回する移動美術館等の教育・普及活動もあるが、開館以来今日迄の総入館者数は二二五万人を超えるに至っている。

わけでも観覧者数が一〇万人を超えた展覧会として、開館記念の狩野芳崖展、ミレー展、ピカソ展、徳川美術館展等が挙げられるが、とりわけ県と山東省との姉妹縁組を記念した山東省文物展は一五万人に及び、人口基盤が僅か一〇万余の、県庁所在地としては全国で最も少ない山口市に立地する美術館としては、まことに稀有な現象といわねばならない。コレクションについては、雪舟か



◀ 企画展会場



▶ 常設展会場 香月泰男室

ら現代までを対象とし、特に香月泰男の「シベリア・シリーズ」を核として、これ迄雪舟の系譜を引く近世の雲谷派、わが国有数の茶陶萩焼と現代のやきもの、近代日本画の狩野芳崖や森寛齋等に比重を置いて、他館に比して寡少な予算をやり繰りしてきたが、一〇周年を期に美術品購入基金制度が実現し、より広い視野と弾力的な運用が期待出来ることと、さらに一〇周年記念事業の目玉ともいふべき収蔵庫の増築に伴い、図書資料、研究室の整備が出来たことは、学芸員の調査研究に大きな弾みともなっている。

翻って美術館が発足して以来、大きな役割を演じているもの一つに、県美術展の改革がある。県美展は県下で唯一の公募展であるが、開館を契機に従来の招待制度を廃止する等、マンネリ化した体質を改善し、改革後は若手作家の登龍門的性格へ脱皮し、質の高い県美展として評価されている。

さらに附言するならば、当館の開館が、地域の活性化にもろに貢献したとして、地域住民の皆さんから大変感謝されていることである。

いま一〇周年を迎えて、もう一度初心に返り、郷土山口県の文化の原

点ともいふべき大内文化を掘り起し、空前の規模と質による「室町文化の中に見る大内文化の遺宝展」を世に問うとともに、今後の当館の果すべき重い役割について想いを深め、地方美術館の在り方として今後ますます個性化を図り、いよいよ広い視野に立って国際化の時代に対応すべく決意を新にしている。県民の皆様とのさらなる御鞭撻と御支援を希つて止まない。

開館10周年特集

自主企画展 この10年の歩み(一)

副館長
足立明男

コレクションが十分でないままの発足であったことにもよるのだが、館運営の重点の一つは、どうしても企画展に向かわざるを得ない。

この一〇年間に本館は企画展を三〇本開催したことになる。その内訳



▲ 美術館全景（3月）

は学芸課事業の自主企画展が二〇本と普及課事業として現代美術を対象とした企画展が一〇本である。

この自主企画展の歩みをたどってみると、昭和五〇年度から本格的にとりくみはじめた本県美術の調査とともに、その深淺の程度の差はあれスタッフの企画展構想は常に暖められていたともいえる。昭和五三年度に開設された開設準備室に専門職員が増員された時点で、年次別企画展計画案が検討された。勿論、開館記念特別展の「狩野芳崖展」は、早い時点で、構想が方向づけられ既に交渉に入っていたのだが、長期計画としての企画展は、とりくむ方針として「まず館自らが本県美術を知ることから」ということの共通理解に立って立案された。各スタッフの発想や研究を第一義に尊重することも確認しながら、テーマの列挙からはじめた。最初のスタッフのミーティングで、提出されたテーマ数は三五にものぼった。領域だけでも、多岐にわたったものであった。当面三年次の計画案を作成し準備にとりくむことになったが企画展の内容は、原則として近代以降の美術を対象したものであった。近代美術館の性格の美術館像を描いてすべて準備してきた

館であったのである。このような準備過程を経て開館を迎えるのだが、開館後に企画展の歩みを見ると、大別して三期に分けてその変遷をたどることができる。

〈第一期〉

専門スタッフ全員が揃った開館年次から昭和五六年度までである。開館記念展を一般公開して間もなくの段階で、昭和五三年度に立案した企画展計画案の見直しを行った。ひとりのスタッフが常に三つくらいのテーマを念頭に入れていた方が、よいとの判断からである。

昭和五五年度

近代洋画の人間像

香月泰男

山口県現代美術展

昭和五六年度

萩焼とその源流

円山四糸派と森寛斎

安野光雅と絵本

昭和五七年度

小林和作

高島北海とアール・ヌーボー

松林桂月

昭和五八年度

東洋陶磁

山口県近代美術の流れ

現代美術の動向

昭和五九年度

現代の茶陶

近代彫刻の展開

長谷川三郎と抽象画

この五ヶ年企画展計画も、翌年策定をみた第二次作品収集計画の検討段階を迎えて、本館の調査研究対象の時代幅が雪舟の室町時代まで拡大されたため、修正された。

昭和五六年度

安野光雅と絵本

古萩―その源流と周辺

円山派と森寛齋

昭和五七年度

中本達也と戦後美術の一断面

高島北海とジャポニズム

松林桂月

昭和五八年度

小林和作―没後一〇周年―

雪舟と雲谷派

三輪休和

昭和五九年度

長谷川三郎と抽象画

近・現代彫刻の歩み

山口県近代美術の流れ

昭和六〇年度

戦後グラフィックアート

京都日本画壇と山口

萩焼―近代―現代―

このプランが検討された昭和五六

年度は、当初計画していた山口県現代美術展を山口県現代美術選抜展として開催し、普及課事業として位置づけた年度である。この選抜展は県美展の改革に伴う、一種のしがらみのある曖昧な企画展となったため、顧問会議でも、館が主体性をもった現代美術展への脱皮が求められ、テーマ展的性格を強化し再出発することになった。昭和五六年度の「山口の現代美術―」がそれである。この時点までは、学芸課事業としての自主企画展を年間三本開催することを前提の計画であったが、予算がらみで二本となった。その結果、タイミングを失ってテーマをとり下げざるを得ない状況とか、その規模において将来に延期するとか、その上、専門職員の転出に伴い担当が交替し、引継ぐといった新しい事態が生じ、プランを変更せざるを得なくなった。

しかしながら、この第一期は、スタッフ全員が、企画展を体験し、カタログづくりをはじめとする展覧会にかかわるあらゆる仕事を、体で覚えた時期でもあった。木炭デッサンで、何度も何度も消しながら輪郭をようやく画面に描いた段階にも似た時期であったといえよう。

(以下次号)

自主企画展 ―この一〇年

●昭和54年度

生誕一五〇年狩野芳崖

10月7日～11月18日

桂ゆき展

3月1日～30日

●昭和55年度

近代洋画の人間像

10月18日～11月30日

香月泰男―その造形と抒情の軌跡―

1月6日～2月8日

●昭和56年度

古萩―その源流と周辺―

10月17日～11月29日

円山派と森寛齋―応挙から寛齋へ―

1月8日～2月11日

●昭和57年度

中本達也と戦後美術の一断面

7月24日～8月22日

三輪休和

10月23日～11月27日

●昭和58年度

松林桂月―その墨と色彩の妙―

10月22日～11月27日

近・現代日本の彫刻

1月6日～2月12日

●昭和59年度

雲谷等顔と桃山時代

6月12日～7月22日

小林和作・須田邦太郎

1月5日～2月10日

●昭和60年度

中国陶磁二〇〇年の歩み

7月13日～8月18日

戦後日本画の一断面―模索と葛藤―

1月7日～2月9日

●昭和61年度

THE LINE―9人のクリエーターたち―

6月27日～7月27日

雲谷派の系譜―雪舟の後継者たち―

10月9日～11月16日

●昭和62年度

松田正平展―熱き鼓動―

10月3日～11月8日

日本画―昭和の熱き鼓動―

1月7日～2月14日

●昭和63年度

一九二〇年代・日本―都市と造形のモニタージュ―

7月15日～8月21日

一人の一九六五～七五―日本の写真は変えられたか―

1月6日～平成元年2月12日

美術館から

* 山口県立美術館一〇周年記念式典のお知らせ
平成元年8月5日(土)
午前一〇時から

* 常設展示室は特別展会場を使用するため7月24日から10月5日まで全室が休室となります。また第二常設展示室についてはひきつづき第43回山口県美術展覧会のため10月27日まで休室となります。

山口県立美術館ニユース
「天花」 第四一号

平成元年八月一日発行
発行 山口県立美術館
〒753 山口市亀山町三二一
☎〇三六元―二五―七七七八
印刷 瞬報社写真印刷株式会社